『総合政策論叢』第21号（2011年３月）
島根県立大学　総合政策学会

アバディーン大学カレッジ統合計画と教育改革

渡　辺　　有　二

はじめに
１．アバディーン大学の創設と発展
２．ジャコバイト反乱とアバディーン
３．アバディーン大学統合計画（1747～49年）
４．カリキュラム改革
５．アバディーン大学統合計画（1753～55年）
６．リージェント制・全寮制・学期延長・奨学金問題
７．アバディーン大学統合計画（1770～72年）
８．アバディーン大学改革運動
９．アバディーン大学統合計画（1785～87年）
総括と展望

はじめに

スコットランド北東部は、18世紀前半にはジャコバイト反乱の中心地であったが、18世紀中葉から世紀末におけるアバディーン大学カレッジ統合計画も元来は、ハイランド地方を文明化する啓蒙の拠点としての高等教育機関整備を意図したものであった。しかしアバディーンのオールドタウンとニュータウンに位置するキングズ・カレッジとマーシャル・カレッジは、異なる歴史的社会的背景を持ち、学生の出身地、カレッジ制度、リージェント（全課程担当教師）制、専門教授制、カリキュラム等々において独自性を維持しながら、カレッジ内部の対立も並存し、1747～49年、1753～55年、1770～72年、1785～87年の統合計画と幾度もの大学改革を経た後、19世紀後半にその統合が実現する[1)]。

本稿では、上記統合計画をめぐる議論と、カリキュラム改革、その結果としての学期延長と奨学金問題、財産管理、全寮制とリージェント制などの問題を中心に、当時の政治的社会的背景の中で、主として18世紀後半アバディーン大学の大学改革について再検討する。

１．アバディーン大学の創設と発展

1494年、ウィリアム・エルフィンストーン司教の請願が、教皇アレクサンダー６世の大勅書で応えられ、アバディーンにセント・メアリ・カレッジが設立された。当時のスコットランドには、セント・アンドリューズ大学とグラスゴー大学が既設されていたが、セント・メアリ・カレッジの設立者達は学寮制大学として発展することを望んでいた。1542年に、このカレッジはジェームズ４世を記念して、キングズ・カレッジと改称されるが、当初から、アバディーン大学とも呼称されていた。また1556年にジョン・ノックス等によっ

て起草された「第一教会条令」（First Book of Discipline）の「学校と大学」の中では、貧しくても能力ある者には高等段階まで教育が保障されるべきであり、学生の能力と家庭の経済状況を考慮して、セント・アンドルーズでは72人、グラスゴー、アバディーンでは各48人が給費生とされ、主要な経費は大学所有地からの収入や学生の家族からの寄金をあてるべきことが提案されていた。上述したエルフィンストーン司教の時代、1514年のアバディーン大学では、12名の給費生が年額６ポンド、13名が５ポンドの奨学金を受け、寮費は無料であった[2)]。

1574年にグラスゴー大学学長に就任するメルヴィルによって、同大学の教育は一新された。アリストテレス哲学がカリキュラムから一掃され、リージェント制（regenting system）が、講義を教科それぞれの専門学者に分担させる教科担任制に切り替えられていた。しかしキングズ・カレッジでは、変革は拒否されていた。1593年、第５代マーシャル伯キースによってマーシャル・カレッジが、アバディーン市内に設立されるのである[3)]。

こうして、同じアバディーン市内の１マイル以内の場所に２つの大学が並立することになったが、共倒れの懸念もあり、両カレッジの統合が緊急視されていた。1641年に、キングズ・カレッジとマーシャル・カレッジの統合が、国王チャールズ１世の命による立法措置で実現される。しかし、その国王チャールズ大学が存続できたのは、カロライナ大学と改称されていた1660年王政復古後１年目までの20年間だけであり、外部からの強制による統合であった上に、キングズ・カレッジに対するマーシャル・カレッジ側の不満が強く、早くも1661年に統合の解消を余儀なくされた。

1689年の名誉革命によって、スコットランド長老派教会が支配的になり、ジャコバイト排除がスコットランドの大学を中心に遂行された。政府は1690年にグラスゴー、エディンバラとセント・アンドリューズから21名の大学教師を免職し、1690年代を通して、直接カレッジ内の問題に干渉し改革に努力した。グラスゴーは植民地貿易の拡大によるイングランドとの合邦の唯一の受益者であったが、それに対して他の地域、とりわけスコットランド東海岸では、1707年以降、ヨーロッパ大陸から西方の植民地帝国への経済軸の移動によって経済的に苦境に陥り、アバディーンやリース、モントローズ等のような東海岸の港や町には不満があふれていた。ジャコバイト主義、監督制主義は、それに支えられ、周辺の同情的な地主も政治的経済的な理由でジャコバイトを援助した。彼らは監督教会を形成し、長老派教会の独占支配を崩そうとしたのである。

２．ジャコバイト反乱とアバディーン

1695年から1715年の間、ジャコバイト主義はアバディーン大学の最大の問題となった。エディンバラ大学とグラスゴー大学では、1690年以降ジャコバイトの教師が任命されることはなかったが、キングズ・カレッジでは、1709年のエロル卿の学長職等の維持によってジャコバイト支配が確実となり、マーシャル・カレッジでも、監督制主義とジャコバイト主義、神秘主義が維持され、大学の７人のメンバーのうち５人はマーシャル伯に任命された者であった[4)]。1710年に、マーシャル伯はマーシャル・カレッジの学長の地位をバウアーに与えたが、バウアーもジャコバイトであった。マーシャル伯は査察サブコミッショナーも兼ねていたため、アバディーンには政府の直接の干渉がおよばなかったのである[5)]。

こうしてアバディーン大学では、1715年までジャコバイトが支配権を維持していた。ス

コットランド懐柔のためマー伯が国務長官に任命されたが、1714年７月、マー伯等も解任されジャコバイトに接近する。1715年９月に反乱が勃発した時、その指導者はアバディーン出身のマー伯であり、反乱軍の中でもアバディーン出身の兵士が多数を占め、アバディーンは反乱軍の基地となった。マー伯のほか、マーシャル伯、エロル卿、ハントリー卿等が反乱軍に加わり、ピーコック、モイアー、スミス、ジョージ・リドルなどの教師もジャコバイトだった。キングズ・カレッジでも、ミドルトン学長、ジョン・ゴードン、ゴードンの息子リチャード、ジェームス・アーカートなどが反乱に加わった。このようにして1715年反乱におけるアバディーンは、他の大学町とは異なっていた。マーシャル・カレッジは都会の環境とアバディーンの商人の願望を反映し、キングズ・カレッジは、アバディーンの後背地や、北部や西部の州出身の学生の比率が高く地主階級の利害を反映しており、２つのカレッジは様々な点で利害が対立していたが、1715年反乱に際しては一致して行動したのである。

ジャコバイト反乱の支持のため、マーシャル・カレッジでの教育は２学期間中断し、15年反乱終結後、ジャコバイトへの協力者は追放され、北東部の州では、多数の町評議員、聖職者、教師、弁護士、医師、キングズ・カレッジ、アバディーン大学の学長を含む学者や監督制教会員が免職された。マーシャル伯を含めて多くの貴族が追放され、マーシャル・カレッジが所有するパトロネジは没収され国王に戻された。神学教授のトーマス・ブラックウェルだけが政府に忠誠を誓い、その報いとして1717年にカレッジの学長に任命されたが、他のすべての教授は解雇された。これらの学者達の追放によって、実際には北東部のジャコバイトの反政府感情を高め、それらの多くは、この地域で学校を開き監督制主義を広めた。キングズ・カレッジのチャーマーズ学長によれば、彼らはこの地域の若いジェントリに影響を与え、宣誓拒否者の集会所を建設し、1745年には反乱軍の将校となり、またジャコバイトの牧師や家庭教師として地域の人々に影響力を行使し続けたのである[6)]。こうして1715年以降の北東部における監督制教会の専門職に対するパージは、憤激したインテリゲンチャの創出につながり、アバディーン州、アンガス州、パース州が1745年反乱の拠点となった。

国王ジョージ１世の即位後、スコットランドの政治はウィッグのロクスバラ公、モントローズ公など、スクアドロンと呼ばれる派閥と、第２代アーガイル公、その弟アイレイ伯らアーガイル派によってコントロールされ[7)]、モントローズ公はグラスゴー大学の総長と後援者にもなった。マーシャル伯が追放された後、アバディーン大学の総長職は空位となり、マーシャル・カレッジもスクアドロン傘下の組織となった[8)]。

1722～23年にはアイレイ伯とロバート・ウォルポールが同盟を結び、アーガイル派が権力についた。ウォルポールはアイレイを事実上のスコットランド国務相として官職の分配権を与え、彼を媒介としてスコットランドを支配した。キングズ・カレッジは、アーガイルの弟の初代アイレイ伯を総長に推挙した。こうしてアーガイル派は、スコットランドのすべての大学に干渉し、1742年にウォルポールの失脚で権力を失うまで大学を支配したのである。

1743年にはスクアドロン派のティーデイル卿が権力に戻った[9)]が、スクアドロン派の権力基盤は弱体で、それは1745年のジャコバイト反乱で露見した。反乱軍がイングランド進軍中の11月、閣議を開くことができず、ハイランド連隊をイングランドに移動させていた。

こうした危機管理意識の欠如と、アーガイルとティーデイルの確執のため、政治的にも軍事的にも、スコットランドでは権力の真空状態あるいは権力者不在の状態が続き、それがジャコバイト軍の快進撃を可能にしたのである。スコットランドにおける権力不在という問題は、1746年初頭にヘンリ・ペラムの閣内での権力が確立するとともに解決され、再び非公式のスコットランド担当大臣としてパトロネジの配分に与ったのが３代アーガイル公であった。

３．アバディーン大学統合計画（1747～49年）

アバディーン大学は1740年代後半には、重大な困難に直面していた。世紀の初め以来、大学で教師の給与を改善する努力がなされたが、報酬は比較的低いままであった。またアバディーンとセント・アンドリューズ大学は、この時期の厳しい競争相手であった。マーシャル・カレッジとキングズ・カレッジでの改革の動きは、セント・アンドリューズの制度改革によってもうながされた。1738年、セント・アンドリューズ大学の３つのカレッジ、セント・メアリ、セント・サルバトルとセント・レオナルドは、1747年６月24日に統合された。統合したセント・アンドリューズ大学は、リージェント制を捨て、別々の教授職を創設し、歴史の新しいポストを作った[10]。その結果、キングズ・カレッジとマーシャル・カレッジはリージェント制を残すスコットランドの唯一の大学となったのである[11]。

1747年初め、マーシャル・カレッジとキングズ・カレッジで、アーガイル公から出された統合の提案が協議された。1747年のニュー・アバディーンの住民からのメモリアルは、統合した大学はオールド・アバディーンに置かれるだろうという、ニュー・アバディーンで増加しつつある憂慮を反映していた。彼らはまた、大学のリージェント達が彼ら自身の給料を増やす目的で統合を望んでいたと主張した。オールド・アバディーンへの移動を妨げるために、市議会は、統合した大学がニュータウンにその拠点を置かなければならないと強調し、この条件が満たされないなら、統合に全力で反対すると述べた。この市議会の非妥協的な立場のためにキングズ・カレッジは、その後、協議を中断した。アバディーンの市議会は、後に1747年の交渉の失敗の責任はキングズ・カレッジにあると批判した[12]。

アバディーンの市議会との行き詰まりを打開するために、トーマス・ブラックウェル（1748年11月にマーシャル・カレッジの学長となった）とキングズ・カレッジ学長ジョン・チャーマーズは、提案された統合問題について「スコットランドの北部に関するメモリアル」（*Memorial concerning the North of Scotland*）において自己の言い分を述べ、それを大法官ハードウィック卿に、1749年３月に伝えた。ブラックウェルとチャーマーズは、国王が教師の給料を上げたが、リージェントはアバディーンでの貧しい報酬のために過去にほかの場所でキャリアを追求するために大学を去ったことがある、と指摘することによって始めた。たとえば、哲学の教授の給料は、年額、24ポンドにすぎないが、この規定は才能ある人には決して十分ではない[13]。また学生は、成熟する前に大学に誘われて入学するが、彼らに対する規律を強制するのは難しい、なぜなら教師は学生（そして授業料）を失わないようにするために寛大にしなければならないと、苦情を述べた。それ故、第１に、キングズ・カレッジとマーシャル・カレッジは、議会の権限によって１つの大学に統合されるべきであり、双方の財源が共通の基金に組み入れられ、そこから適切な基本財産が、最も必要で役に立つ科学の多くの教授に提供されるべきである。第２に、マーシャル・カ

レッジの建物は、政府によって購入され、兵舎に変えられるべきであり、統合した大学がキングズ・カレッジに設立されるべきであると彼らは提案した。

こうしてチャーマーズ学長は、カレッジ統合によって、政府はスコットランド北部を平定する運動を促進できると主張し、次のように述べた。1715年以前の大学の世襲的パトロンであるマーシャル伯は、そのカレッジをジャコバイトの教授で満たし、大学聖職者のブラックウェル以外のすべてが1715年の反乱に加わり、反乱鎮圧後、教授職を奪われた。追放された３人のリージェントは自分達で学校を開き、そのジャコバイト教義で若いジェントリに悪影響を与え、彼らが1745年の反乱軍の将校になった、と主張した[14]。チャーマーズ学長らは、そのような不満を抱く大衆を正しく教育することによってのみ、北部にはびこる不忠の精神は除去されるだろう、として、キングズ・カレッジとマーシャル・カレッジが２つの独立したカレッジのまま残るなら、この目的は達成できない、として統合の必要性を強調した[15]。しかし、チャーマーズとブラックウェルによる訴えは、政府に聞き入れられなかった。またマーシャル・カレッジの建物を売却するよう市議会を説得するのはさらに困難であった。こうして1747～49年の統合計画は、一時中断することになるのである[16]。

４．カリキュラム改革

1752年９月１日、マーシャル・カレッジの教師達は、トーマス・ブラックウェルのリーダーシップの下、カリキュラムを再検討することを始めた。10月中旬までには、提案された改革の詳細に同意し、1753年１月11日に行われた会合では、マーシャル・カレッジのリージェントと教授は、計画に関する書類を検討し、「哲学の改革以来、衒学者によって導入された哲学を教える現在の順序は、非常に不適当である」と結論を下した。というのは、推論することを学ぶことができる特定の事実の多くの知識を身に着ける前に、学生に証拠と推理に関する抽象を扱うことを強制したからである。18世紀前半までの旧カリキュラムでは、学生は最初に論理学や存在論を学び、その後、心理学、道徳、政治、自然哲学を研究するが、これはアリストテレス学派の学習法であり、形式的な議論の能力を身につけるのが主な目的で、論理学や形而上学の一般原理からの演繹的推論が重視されていた。しかし新しいカリキュラムは、旧カリキュラムとは逆に、まず１年目のラテン語やギリシャ語などの古典学習の後、２年目は基礎数学、博物学、地理学、歴史を学び、その後３年目に、自然哲学や高度な数学、物理学、道徳、政治学を研究した後、最後の４年目に論理学や倫理学、形而上学などを学ぶべきであるとしたのである[17]。

特にアレクサンダー・ジェラードは、『教育計画』（*A Plan of Education in the Marischal College and University of Aberdeen with the Reasons for it*）を発行し、その中で、カリキュラム再編成の内容を発展させた。ジェラードによれば、マーシャル・カレッジの学長と教授は、最近、哲学の教育の順序について、非常に実質的な変更をおこなった。このカレッジで以前行われていた順序は、古代の哲学者のほとんどが従い、その後スコラ哲学によって信奉され、ヨーロッパのすべての大学に採用されたもので、論理学に始まり、存在論（形而上学）、聖霊論（Pneumatic）、道徳学、政治学、そして最後に、自然哲学を教えていた。しかし哲学は、その時代から大きく変わったとして、マーシャル・カレッジのマスター達は、哲学教育の新たな原理に基づいて、次のような教育計画を主張したのであ

る[18]。

Ⅰ、第１学年では、ギリシャ語教授のもとで古典学習に費やされる。その目的は、諸科学が最初に伝えられ、その元来の用語が維持・使用され、常に知識の基礎と見なされる優雅な言語を教えることだけでなく、古代の文物を説明し主要な古典作家に精通することによって、若者の精神を切り開くことである[19]。

Ⅱ、第２学年の授業においては、教授が適切と考える多くの時間が、ギリシャ語やラテン語を読むことに費やされる。彼らは、これらの言語をさらに上達させ、最良の著者と対話することによって、天才達の著作の趣を得るのである。次に彼らは、博物学と世俗の歴史、地理学や年代学を教えられるべきである。これらの学習は、言語の学習と物事の一般的推論との中間的な段階と判断される。歴史は、若い精神に、その才能に適した教示をなし、同時に哲学の結論を理解するための準備を徐々に行うのである。歴史の学習、特に博物学は、それ故、哲学に先行するのが適切であり、それは精神を解放するだけでなく必要な資料を提供するからである。これらは、以前の大学教育では完全に無視された知識の要素であった。それは新たな教育計画の特徴であり、これらの有用な学習分野が教育計画に導入され、特に博物学は、ほとんどすべての生命科学、農業、園芸、工業、医学などの直接的基礎である。世俗の歴史は、時代や事実の叙述に限定されず、国家の抗争や没落の原因、世界で起きた大きな革命の説明や、人物、マナー、習慣などに関する洞察に拡大される。また、このクラスの学生達は同時に、数学の初級編の教育に出席する。数学的な諸科学の知識は、哲学の絶対不可欠な鍵だからである[20]。

Ⅲ、第３学年の学生達は、自然哲学、実験哲学の学習に入り、機械、流体静力学、気学、光学、天文学、磁気、電気などの分野を教えられ、数学の学習を続けながら、時間が許す限り、評論や純文学の原理を教えられる。

Ⅳ、最後の学年では、聖霊論や自然神学、倫理学を含む道徳哲学、法学、政治学、論理学、形而上学を教えられる。３人の哲学教授とギリシャ語教授は、11月初めから４月末までのカレッジの学期の全期間、１日３時間、学生達の世話をする[21]。

スコラ哲学のカリキュラムは、論理学が最初に教えられるべきだという見解に基づいていたが、そのスコラ哲学の論理学は真理の発見に役立たず、ロックが『人間知性論』で述べたように、具体的概念が抽象的概念に先行すべきである。こうしてジェラードの論文は、スコラ学の崩壊によって、哲学と論理学の性格は変化したと主張し、論理学をコースの最初から最後４年生の授業に移動することを正当化した。また、このようなマーシャル・カレッジの教師達の努力の結果、学生数の増加によって、公の賞賛を経験し始めている、と主張したのである[22]。

キングズ・カレッジとマーシャル・カレッジの間の敵意は高まっていたが、アバディーンの教員達は、アバディーン哲学協会やワイズクラブ（Wise Club）の会合に集まって、彼らの思想を共有することができた[23]。この点においてジェラードの論文は、ジョージ・ターンブルの『自由教育論』（*Observations upon Liberal Education*）における、論理学は他の科学の後に教えられるべきである、というターンブルの教育学の再表明であった。このターンブルは、トーマス・リードの教師として、また教育と道徳哲学にかんする著作の著者として足跡を残し[24]、伝統的な哲学カリキュラムの無用性を非難して、自然哲学や、政治や歴史などが、学生に教えられるべきであると主張した。彼はマーシャル・カレッジ

のカリキュラムに歴史を含めることの主唱者のひとりであり、これはキングズ・カレッジとマーシャル・カレッジにおける世俗の歴史の追加で正式に認められることになる。また地理学の他に、特に２、３年生は数学や博物学、天文学、光学など新たな自然諸科学に重点が置かれていることも大きな特徴であり、これはスコットランドの他の大学にも影響を与え、後のアバディーンにおける博物館、天文台、植物園設立運動にも繋がっていく。一方、これはキングズ・カレッジにおけるカリキュラム再構築にも刺激を与えるのである[25]。

マーシャル・カレッジのイニシアティブに反応し、トーマス・リードを中心とするキングズ・カレッジの教師達は、学生の規律に関する一連の法律の検討に着手し、1753年３月23日に、「再提案」（*Further proposals for the better Regulating the Discipline of the College and Improving the plan of Education*）を検討するための委員会を設立した。カレッジの運営の規則が、７月６日に提示され、８月17日にカリキュラムや教育制度から、学期の長さ、奨学金、学生寮、改訂されたカリキュラムを扱う、新しい規則を提出した。学期は１カ月拡張され、11月前半ではなく10月前半から始まることが提案された。延長された学期の間、多くの少額の奨学金を統合することを提言し、教師の直接の教育的道徳的な保護の下で、すべての学生がカレッジに宿泊することを強制すべきであると提案された。この点に関しては、委員会はマーシャル・カレッジの提案と異なっていたが、トーマス・リードの委員会が作成し改訂したカリキュラムは、数カ月前にマーシャル・カレッジのリージェント達によって同意されたものとほとんど同じであった。すなわち１年目に、ギリシャ語に専念した後、学生は（理論的、実用的）数学、ギリシャ語、博物学の授業に出席し、３年目は、数学や自然哲学に専念する。そして、最後の４年目に、人間精神の哲学、およびそれに依拠する科学に携わる[26]。

キングズ・カレッジにおける1753年の改革には幾つかの問題も含まれていたが、マーシャル・カレッジは、ジェラードの計画で述べられたプログラムを追求し続けた。しかし、結果的にはカリキュラム改革の教育的な意味は、主としてシンボリックなものであった。スコラ学の影響を除去することによって、新たなカリキュラムは今や特質において、洗練され有益で啓蒙的である、ということを社会一般への、特に入学希望者の両親へのシグナルとして機能したからである[27]。1754年４月には幾つかの追加とわずかな変更を委員会の計画に付け加えられる。カレッジ通信員からの陳情の結果、古典的な学習の重要性が強調され、その結果、ラテン語とギリシャ語が１年生と同様、３年間の哲学の時期に毎年、週に２時間教えられることになることが同意された。マーシャル・カレッジでは実用的な証明や実験を含む新しい科学的なカリキュラムを特に発展させることになった。一方、人文学の教授は彼の専門科目に加えて１年生のすべての授業を無料で教えるべきであるという提案は、無料の授業は利益にならないという理由で撤回された。また、寮生を引き付けて収入を上げようとする意図を持った全寮制度は、マーシャル・カレッジでは採用されなかった。

こうしてジェラードとその同僚たちは、既存のカリキュラムが教えられていた順序を変更し、スコラ主義を拒絶した。また英語が教授手段の言語として、ラテン語に取って代わったが、それはオランダの諸大学との断絶を意味した。英語の他に音楽、ダンス、フランス語の教育のための準備も行われたが、これらの点からも、1753年のカリキュラム改革が、北部のジャコバイトの学生を意図的に教化し、スコットランドにおけるハノーバー朝の支

配強化に貢献しようとする側面を持っていたことを物語っている[28]。

５．アバディーン大学統合計画（1753～55年）

1753年８月17日、キングズ・カレッジの教授陣の会合前に、委員会は学期の長さ、奨学金、カレッジの中の学生の住居、大学の食事、および改訂されたカリキュラムに関する新しい規則を提出した。そして、すべての学生がカレッジの寮に入り、常に教師の目と権威の下に置かれねばならないと主張した[29]。キングズ・カレッジとマーシャル・カレッジでのカリキュラム改訂の努力は、統合計画を蘇らせ、２つのカレッジのメンバーから成る委員会が、1754年に結成された。1754年11月８日、双方のカレッジは新たな提案を批准した。その中で、両カレッジの基金は１つの共通の資本金に統合され、統合したカレッジの教授達は、年30ポンドを給与に付加され、双方で科目が重複する教授の場合、授業を行わない教授は、授業を行う教授の４分の１の収入を給与に加えて支給されること、統合するカレッジの所在地に関する問題については提案されないこと、その他の問題は双方のカレッジの合同会議における多数決によって決定されることなどが満場一致で合意された[30]。1755年２月５日、キングズ・カレッジのチャーマーズ学長が、関係者双方が閉鎖的で利己的な見解を捨てて、公共の利益を優先させなければ成功の見込みはない、と述べたにもかかわらず[31]、キングズ・カレッジは、その建物の中に新しい大学の拠点を置くことを主張し、アバディーンの市議会は、再びその敷地はニュータウンになるべきことを要求した。このため、アーガイル公は、キングズ・カレッジ総長のフィンドラター伯の調停を求めたのである。1755年３月17日、フィンドラター伯はニュータウンの市議会の支持を決め、アバディーンの行政長官とマーシャル・カレッジの職員は、協定書の形で、仲裁者の決定に従うよう主張した。しかしキングズ・カレッジは、エディンバラの法律顧問から、その調停に従えば、キングズ・カレッジ当局が権限外の行為をすることになる、という法的アドバイスを受けこともあり、交渉から手を引いて、その統合計画自体は再び崩壊するのである[32]。

キングズ・カレッジは、別のメモリアル（*Memorials, Relating to the Union of the King's and Marischal Colleges of Aberdeen*）を発行することによって自己の行動を正当化しようとした。このメモリアルに見られるように、キングズ・カレッジとマーシャル・カレッジの、大学生活のモラル・エコノミーに関する違いもまた、この統合計画をめぐる論争で頂点に達した。1753年以前には、キングズ・カレッジの学生はマーシャル・カレッジの学生と同様に個人の住居に宿泊していたが、リードの委員会によって定められた新しい規則の下では、学生寮に住まなければならなくなった。こうして1754年の規則では、学生は教師と寝食を共にすべきとし、家族を持つ教師達は、下宿と食事を提供するよう推奨された。その結果、チャーマーズ学長とキングズ・カレッジの教師達は、1751～55年の統合交渉において、都市における怠惰への誘惑と道徳的不正を警告し、マーシャル・カレッジのような都市の大学では、学生達は、安く住むことができる地区を選び、その結果、下層階級の人達と共に居住し交際する、と批判した。さらに、両方のカレッジの学生が14歳から19歳であるという事実を強調し、美徳と勤勉に導くための厳しい鍛錬が必要であり、それはキングズ・カレッジのカレッジ制度によってのみ可能となると強調したのである。こうしてカレッジでの学生生活の道徳的な利点を誇示したが、その背景には、彼らがオールドタウンの安価な土地や牧師館を利用できるという経済的特権の享受という側面もあっ

たことは否定できない[33]。

また、子供の道徳的状態に関する両親の心配を利用し、大学の規律と秩序によって彼らに義務を果たさせる基盤を確立すべきであり、キングズ・カレッジの教師は学生の担任として彼らの世話をするべきである、として、キングズ・カレッジは専門教授制度を批判し、リージェント制度を維持して、全寮制に戻るべきことを主張した。現在では一般的に、リージェント制度は17世紀、18世紀スコットランドのアカデミックな進歩を阻害した要因とされているが、現代のキングズ・カレッジ教授のウッドは、この見解について、19世紀に定着した専門教授制の価値観に基づくウィッグ的な考えにすぎず、当時の学生の年齢などを考慮すれば、リージェント制は必ずしも教育や研究への障害ではなく、カレッジの事情を考えると、また教育が知識伝達だけでなく人格形成の問題であるという点を考えると、キングズ・カレッジによるリージェント制度維持の決定は、当時としては必ずしも時代に逆行するものではなかった、と論評している[34]。

一方、オールド・アバディーンが、より良い場所として認められるべきだという考えは、アバディーンの市議会から再び激しい反対を受けた。彼らは、シヴィックな大学の美徳を擁護し、学生が都市に住むことの教育的利点を指摘するとともに、「アバディーンの住民はアバディーンの町に大学が置かれることを非常に切望しているので、もしそうでないなら、彼らは怒って子供の教育の便宜のために私設のアカデミーをニュータウンに設立するだろう」と警告し、チャーマーズとブラックウェルの前述したメモリアルと同様の見解を繰り返して、彼らは、「そのようなアカデミーが教会と国家における我々の体制に大いに不満を抱いていると恐れる、非常に大きな理由がある」と言及した[35]。マーシャル・カレッジの教師達もまた、ニュータウンが学生のための下宿を提供し、学生の道徳を監視することもできるが、キングズ・カレッジに統合する場合、学生数の増加のため、学生寮の同じ部屋に数人を入れなければならず、それは学生の勉学を妨げ、学生は授業にも出席せず、堕落の原因ともなり、カレッジにとって大きな損失である[36]と批判した。

こうして統合計画自体は再び崩壊するが、にもかかわらず、1753～55年の改革は、一面では学生の市場を獲得して、不満を抱く人々を転向させようとする願望によって増幅されたものと読むことができる点を、これらのメモリアルは示しているのである[37]。

6．リージェント制・全寮制・学期延長・奨学金問題

18世紀以前のスコットランドの大学では、独特なリージェント制をとっており、カレッジの教育編成は，一般的には１人の総長と４人のリージェントから構成されていた。各リージェントは担当する１クラスで、すべての教養課程にわたり自ら全科目を教えた。学位をとろうとする学生は、ラテン語、ギリシャ語、論理学、数学、自然哲学、道徳哲学が必要であり、リージェントは、これらの全科目を教えた。リージェントは学生のあらゆる事柄について面倒を見、大学内外での学生のすべての活動を指導・監督し、学生の道徳問題にも責任を負った。18世紀のスコットランドでは、教授による専門教育の充実が図られ、エディンバラ大学では、リージェント制からの最初の脱却が1674年の数学教授の任命に始まり、1726年にはグラスゴー大学で、1747年にはセント・アンドルーズ大学でも同様の改革が行われた。こうして他のスコットランドの大学がリージェント制を廃止あるいは変更した後も、アバディーンの両カレッジは、２年目、３年目、４年目の授業のためにリージェ

ント制を保有した。（１年目はギリシャ語の教授によって教えられていた。）カリキュラム改革の際、専門教授制に変えることが検討され、マーシャル・カレッジは、1753年にそれを採用した[38]。

しかしキングズ・カレッジでは、マーシャル・カレッジと意見を異にし、トーマス・リードや彼の同僚は、リージェントの方が、学生の進歩を評価でき、個人的行動をよりよく監督することができるとし、学期ごとにチューターを変えるのは、学生にとって有害である、と主張した。現在では、専門教授制度は大学にとって自明のものであるが、18世紀スコットランドの大学生が平均年齢14才位と若かったことを考慮に入れると、トーマス・リードの見解は必ずしも時代錯誤とも言えない。こうしてキングズ・カレッジの教授陣は、リージェント制と全寮制の長所を再び強調した[39]。

アバディーンの２つのカレッジの見解の相違は、マーシャル・カレッジでは、アバディーン州の貿易・商業地区や都市部のアバディーン市内とその周辺部の小ジェントリ出身の家族の学生で、自宅通学者のため家族とともに生活していた学生が多かったのに対し、キングズ・カレッジでは高地地方の北部辺境地域のジェントリや地主階級出身の学生が大部分を占めていたこととも関係していた。学生を常に教師の目と権威の下に置き、また学期を延長し、同じ授業料でより多くの教育を提供することによって、学生の親や北部地方の聖職者と学校の教師に感銘を与えることを意図したものでもあった[40]。

しかし新しいカリキュラムは、社会の多様な要求に応えるための科目数の増加もあり、より長い学期間を必要とし、入学希望者は、余分なコストがかかる費用を払うことができないか払おうとはしなかった。またキングズ・カレッジでの全寮制強制の試みは、その後、同カレッジでの学生数減少を引き起こし、その結果、特にギリシャ語、副学長、リージェントの報酬を削減した[41]。全寮制はキングズ・カレッジでも10年後に放棄され、1799年にはリージェント制も廃止される。19世紀初めまでには、アバディーンのどちらのカレッジでも、学生が寮に居住してカレッジ・テーブルで食事を取るべきとは主張されなくなるのである。

前述したように1753年８月17日、キングズ・カレッジでは、学期の長さ、奨学金に関する新規則を提出し、学期を１カ月拡張し、11月前半ではなく10月前半から始め、５月までの７ヶ月の学期にすることが提案された。同時に、少額の奨学金の結合と、1754～55年の奨学金の競争を中断させることも提案された[42]。

具体的な例をあげると、1732年に、キングズ・カレッジで学生に３ポンド６シリング８ペンスの寄付金奨学金が与えられていた。しかし両方のカレッジでは、奨学金の額の低さが問題となり、そのためキングズ・カレッジは、学期間を延長した時、この問題を解決しようとし、給費生達が、より良い生活を維持するため、６ポンド13シリング４ペンス以下にならないように、少額の奨学金を結合させると決議した。その結果、1752年の給費生は、入学時に基礎奨学金と1753年にフラトン奨学金を受けることになった。しかし1754年の奨学金が打ち切られたため、３人の入学生はマーシャル・カレッジに転校した[43]。反対派は、奨学金の変更によって引き起こされた犠牲は非常に大きく、最初に奨学金を受けることのできる学生数は減少し、そして奨学金を受けた後も続けて獲得するのが困難になった、と批判した[44]。こうして1750年代の改革は、カレッジが期待した入学生の増加を引きおこすことはできなかったのである。1759年に、幻滅した教師は、次のように表明した。「学生

の数は、主として次の２つの原因のために減少した。第１は学期の費用と長さのために。第２に、カレッジの奨学金の結合のために」。結果的にはキングズ・カレッジの戦略は失敗することになるのである[45]。

かくして、学期の延長と奨学金制度の変更は、カレッジの中で危機につながった。地方の後援者は、奨学金の結合を考えたが、それは学生数がさらに減少するという結果をもたらした[46]。マーシャル・カレッジでは、以前の短い学期を維持しているが、その学生数は数年間、毎年増加し、キングズ・カレッジの倍以上に増えており、給費生でない一般学生（Libertines）の数も多い、として、さらに地方のジェントルマンや聖職者から受ける援助の少なさについての不満も、キングズ・カレッジ内部からも高まってきた。

事実、マーシャル・カレッジは、1750年代に学期を延長しなかった。これに対する解決策は、もとの短い学期への復帰であったが、キングズ・カレッジのリージェント達は、学期を延長し少額の奨学金を統合することを強く主張し、1759年10月31日の教授会は規則を依然として曲げないことを小差で決議した。これらの動きは、大学の中で更なる騒動と法律論争を生み、結局1760年には、学期延長の計画全体が瓦解する[47]。給費生の少ないグラスゴーとエディンバラ大学では、教育課程は改革されなかったが、学生は授業料を払えば、どのような授業にも、どのようなクラスにも歓迎された。しかし、アバディーン大学では、奨学金の受給者は全学生のかなりの割合を占めていたのである。キングズ・カレッジの給費生と一般学生（libertines）の相対数は、1750年代と、その後、著しく変化した。例えば1752年には、17人の給費生（クラスの68％）と８人の一般学生がいた。しかし、1758年には、１年生の給費生は13名か14名で、一般学生は２名か３名しかいなかった。1776年には、18名の給費生（39.2％）と28名の一般学生になる。マーシャル・カレッジでは、キングズ・カレッジと比べて、1750年代の間、1755年39名、1756年25名、1758年70名と入学者も多かった[48]。

前述したように、改革されたカリキュラムの下では、両カレッジの学生は１年目を超えて、ラテン語とギリシャ語を取ることが期待された。これはほとんどの期間、任意であったが、キングズ・カレッジでは1817年、マーシャル・カレッジでは1818年に、卒業要件となる。学生は１年目にイギリスの文学の演習とともに、ギリシャ語とラテン語を勉強した。２年目には、世俗の歴史や博物学とともに初等数学を、３年目には、自然哲学とともに高等数学を、４年目には、道徳哲学と論理学を学んだ。問題は、入学した学生が、ラテン語に関する適切な知識をもっているかということであったが、キングズ・カレッジの人文学教授は、入学者の約４分の３は基礎的なラテン語の知識も持たないと不満を述べていた[49]。

1753年のカリキュラム改革、リージェント制、全寮制、学期延長、奨学金などの諸問題などをめぐる党派的な内部対立は、1756年以降、ますます激しくなり、教師達は２つの敵対勢力に分裂し、1760年代の半ばまで、様々な問題について論争し続けていた。新カリキュラムを後援したリージェントのトーマス・リード、人文学者トーマス・ゴードン、ヘブライ語の教授ジョージ・ゴードン等が一方の党派を構成し、他方の集団には、学長ジョン・チャーマーズと彼の親類、副学長アレクサンダー・バーネットなどがいた[50]。

1760年にチャーマーズ学長は、人文学者ゴードンが充分に義務を果たしていないと不満をもらし、学生達も人文学の授業への出席義務に反対した。1761年にキングズ・カレッジの総長に任命されたデスクフォード卿は、1762年に学生達の要求を容れ、評議会（the

Senatus）が出席義務を取り消し、授業料を決定する権限を持つことを表明した[51]。チャーマーズ学長派は、学期間を短縮し、奨学金と教育政策に関する大学の会合から反対派を締め出した。このため人文学者ゴードンの収入は激減した[52]。1764年に、トーマス・リードの後任にオーグルヴィが就任し、1765年には、ジェームス・ダンバーが任命された。キングズ・カレッジでは、デスクフォード卿の体制は、学頭の選挙の復活を伴っていた[53]。マーシャル・カレッジでは、1761年のアーガイル公爵の死の10日後、アーガイルの甥のビュート卿が総長に選出された。ビュート卿は、マーシャル・カレッジの啓蒙的パトロンとしてアイレイの仕事を受け継ぎ、青年時代の国王ジョージ３世のチューターでもあったが、後に首相ともなる人物である[54]。

７．アバディーン大学統合計画（1770～72年）

1770年、前述したキングズ・カレッジ人文学者トーマス・ゴードンは両カレッジの統合計画を作成し、*"Reasons and Proposals for an Union of the King's and Marischal Colleges of Aberdeen"* を発表した。その中で、ゴードンは、両カレッジの教授の給与は非常に低額で、例えば医学の教授は13ポンドか14ポンドの給与しかなく、学識と能力ある者にとって希望を挫くものであり、実際、アバディーンから、もっと待遇の良い大学に移る教授が多い。また、いずれのカレッジも建物を維持拡大する充分な資金がない、として、これらのカレッジの現状を打開する最も効果的な方法は、両カレッジの統合である、と主張した。

その際、キングズ・カレッジとマーシャル・カレッジは、アバディーン大学という名称の１つの大学に統合されるべきであり、両カレッジに所属する、すべての土地、財産、歳入、教区税、定期収入、相続財産、動産、奨学金、パトロネジは、その大学に属すべきである。そして、それは学長とその他のマスターの管理の下に置かれるべきであり、大学の学長や教授の給与支払いのための基金の年間の全額は、210ポンドの助成金とともに、１つの共通基金に結合されるべきである。統合した大学では、１人の学長と11人の教授が置かれ、医学、解剖学、数学、自然哲学、博物学、ギリシャ語はマーシャル・カレッジに、学長と、神学、東洋言語、法学、道徳哲学、人文学の科目はキングズ・カレッジに配置されるべきものとした。しかしゴードンは、双方のカレッジの奨学金の多くは少額で、学生支援のためには全く不十分で、そのような奨学金のパトロンの同意によって、２つ３つの少額の奨学金を結合することは合法的である、という見解をこの計画の中でも依然として維持していた[55]。ジョン・チャーマーズによると、1771年冬早々に召集された両カレッジの合同会議に提案される、統合に関する条項を作成するための委員会が任命されたが、キングズ・カレッジの他のメンバーは、提案された条項を拒否し、この計画も挫折する。

マーシャル・カレッジのジェラード教授は、前述した1755年のキングズ・カレッジの『メモリアル』を批判し、別のメモリアルにおいて、教育の場所をニュー・アバディーンに固定することは、実際、カレッジの公的基金や現職者の利益の侵害ではない、とするとともに、キングズ・カレッジの生活に関して、「カレッジの中に学生を集めることは、修道院の中に修道士を閉じ込めるのに似ている。それは悪徳を抑制するのではなく、助長するものであり、そのような監禁は、私たちが自由な教育によって理解していることとは正反対である。オールド・アバディーンには、最も低い身分で最も腐敗したマナーの人々が居住しているので、学生はそこから生ずるすべての不便にさらされている。」「マーシャル・

カレッジのマスター達がオールド・アバディーンに移動することは、多くの点で私的利害にとって不利であり、統合する大学の所在地をニュー・アバディーンに置くことによって、はるかに大きな利益を得ることになる。なぜならマーシャル・カレッジの学生が120人近いのに対して、キングズ・カレッジでは半数の学生しかいないからである」と皮肉った。ジェラードは、その後、キングズ・カレッジの神学教授になり、オーグルヴィの統合計画の最も辛辣な反対者の１人となるのも、また皮肉ではある[56]。

18世紀中葉以降、教授と地主との関係にも、変化が生じていた。スコットランドの土地保有制度、とりわけ領地の限嗣相続権は、オーグルヴィその他の人びとによって厳しい批判にさらされるようになり、地主の側でも、給料の増加を主張する教授たちを批判の目で見るようになった。大学の費用は地主たちの負担ともなるからである[57]。

８．アバディーン大学改革運動

前述したように、キングズ・カレッジは1495年に、ウィリアム・エルフィンストーン司教によって創立されたが、彼は、学生の資金援助のため給費金制度を創設し、大学行政のための手続きを定めていた[58]。これらは、後に幾分修正されたが、オーグルヴィの時代に、少なくとも理論的には、カレッジ運営方法を依然として大きく規定していた。概念的には、カレッジの問題の運営は、大学構成員と総長（the Chancellor）と、学生の代表としての学頭（Rector）の間で広く分担されていたが、1716年～61年、1770年～93年の間、キングズ・カレッジには総長がおらず、学頭もしばしば空席であった。こうして実際には、学長（the Principal）、副学長（Sub-Principal）、および学生以外の数人の大学構成員から成る、オーグルヴィが徒党（cabal）と呼ぶ人達の手に、実権が集中していたのである。

デスクフォード卿の２人の部下、ジェームス・ダンバーとウィリアム・オーグルヴィは、18世紀アバディーンの教授達の中で最も革新的であった。オーグルヴィは、1781年に有名な『土地所有権論』（*An Essay on the Right of Property of Land*）を出版した後、1780年代前半には、キングズ・カレッジの管理に関する一連のキャンペーンを開始した[59]。オーグルヴィは、早い時期にキングズ・カレッジで植物園の設立に希望を託していた。1783年にキングズ・カレッジに隣接した土地に植物園を造る提案にオーグルヴィを導いたのは、植物学の教育に対する彼の責任からであった。同じ年、ジョン・チャーマーズ学長が、副学長ロデリック・マクロード、法学教授ウィリアム・トム、学長の甥の医学教師ウィリアム・チャーマーズ、ギリシャ語教師ジョン・レスリー、神学教授アレクサンダー・ジェラード、リージェントのトーマス・ゴードンの７名に支持されて、この土地の一部をギリシャ語の教師の息子ヒュー・レスリーに売却することを提案した。この土地はカレッジが所有する湿原と小作地（croft）を含んでいた。オーグルヴィは、売却に強く反対し、所有地の売却が悪しき先例になると主張した。約15年前に、カレッジの土地が永代租借地（feu）となり、２年前に人文学研究者の土地の一部が永代租借地として与えられた。今、３度目の所有地譲渡が行われようとしているが全く不当であり、カレッジの土地を苦労して集積した創設者の意図にも反している、としてオーグルヴィは、同僚に彼らがカレッジ所有地の管財人（trustees）であることを思い出させようとした[60]。しかし彼の抗議にもかかわらず、所有地の売却は行われ、ハンフリーズによれば、この失望が彼の生涯を大きく変えることになった[61]。

その後、オーグルヴィは、キングズ・カレッジの問題をさらに調査することを決め、カレッジ所有地の疑惑に満ちた取引が、氷山の一角にすぎないことを発見した。次の２年間、オーグルヴィは、キングズ・カレッジの不正な慣行を改革するための一連の提案にとりかかった。これらは、７人の教師による給費生基金の流用、医学と神学の学位に関わる収賄、土地以外のカレッジの財産の売却、学長を含めた名誉職の地位の乱用に関する改善要求であった。奨学金の流用と失政に加えて、オーグルヴィは奨学金基金（Bursary Funds）の管理と処理に関して批判した。第１は、カレッジの教師による給費生からの厳しい取り立てである。1784年11月20日に提出された提案の中で、彼は言う。それはディナー代と見たこともない銀のスプーンの使用料であり、あらゆる給費生（Bursar）が例外なく１ポンド10シリングを毎年、銀のスプーンの名目で代理人（procurator）に支払うことが求められ、上記の給費生から毎年徴収されているスプーンマネーは、学長と教授の間で追加給料として毎年分配されている、と。実際、カレッジ・テーブルで食事するために必要であるという理由で、1753年には、その徴収は寄付金給費生からのすべての給費生まで拡大されていた[62]。

さらにオーグルヴィは、大学創設者によって定められた額と1784年に給費生が実際に受けていた額との間の、不均衡に関する注意を呼び起こし、エルフィンストーンの給費生になされた支払いが、もともとの価値よりはるかに下回っていることについて指摘し、次のように述べた[63]。創設者エルフィンストーン司教の給費生は、12マーク（13シリング４ペンスに相当）の毎年の支払いと、下宿と無料の教育の権利を与えられていた。ジェームズⅤ世の治世には、少なくとも12マークが大麦か食事の12ボールと同等であった。しかし、給費生が現在受け取る合計３ポンド８シリングは、最も多く見積もっても、６ボール以下である、と。

これに対してチャーマーズ学長派は、給費生が無料の教育を受けるべきというのは創設者の意志ではなかったと主張した。オーグルヴィは「それがカレッジの明らかな義務であり、それを明示する必要もなかったということが、そこで言及されていない理由である」と述べ、給費生に関する当時の習慣は、よく知られたもので、それは1755年にチャーマーズ自身によって発行されたパンフレットの中にも見出されると批判した。また、彼らの管理下の基金から、教授が彼ら自身の利益のためにローンを受ける習慣や給費金が未使用の状態が続くのを許容し、給費金基金を蓄積したりする習慣は、勅許状違反であり好ましくない[64]。例えば、給費生がカレッジを欠席することはよくあるが、教師達は、欠席者の名前のリストを４人のリージェントに提供し、リージェントが未使用の奨学金を処分し、奨学金基金を不正流用している、と批判した[65]。オーグルヴィが７名の教授を批判したその他の問題の１つは、キングズ・カレッジの大学図書館であり、すでに「アバディーンの公共図書館への提案」を発行していた。特に、図書館の書籍には、長い間、貧弱な基金しか与えられず不完全なままである、と指摘した。これに対してキングズ・カレッジは、1785年10月、カレッジの建物の維持と修理はカレッジの義務であるが、エルフィンストーン司教の設立憲章には、書籍についての言及がないので、本の購入はカレッジの基金の法的な義務ではない、と回答した[66]。

これらのカレッジ予算と収入の管理に関してオーグルヴィは、1785年４月９日、*“Reasons of Protest against the Resolutions of the College meeting”* の中で、「我々の間

で、毎年剰余金（増加収入）全体を分割する我々の現在の方法は、厳密には正当でもなく適切でもない」として、学長や教授達が剰余金（accrescing revenue）を給与の増額のために分割する慣行を批判し、増加収入は「大学にふさわしい学問やアカデミックな目的」に適用されるべきである、と主張した。そして、1785年１月１日にも、土地収入全体を自分自身で使用する権利を持つ限嗣不動産相続人と我々の立場は異なっており、我々は大学の公共の使用のために剰余金を委託されているのである、として「我々が剰余金（増加収入）を快く分割できるのは、他のすべての公共の要求が偏見なく満たされた後に初めて可能になるのである」と断言し、剰余金を給与の増加のために分割する前に、大学教育の設備充実に努めるべきことを強調した[67]。

これに対して、オーグルヴィがキングズ・カレッジの徒党（cabal）と呼ぶ教授達は、「剰余金を分割する現在の方法」は、「1750年までさかのぼって、すべてのメンバーの満場一致の議決と同意によって決着されており、最後の査察（Visitation）の際、総長と学頭の承認を受けており、その時から現在まですべての教授によって定期的に一様に行われてきた」と回答した。しかしオーグルヴィが、この査察に関する記録調査を要求した時、さまざまな理由によって、オーグルヴィは記録調査に適任の信頼すべき人物ではないと学長は決定した[68]。

これらのカレッジの問題についてオーグルヴィが行った一連の抗議は、２年間続いた。しかし、それらの要求が拒否されたことが、キングズ・カレッジの問題のいかなる改革も、内部からは不可能であると納得させた。そして、このことは、オーグルヴィを、アバディーンのより広い教育的制度的改革の一部として、1785～87年のキングズ・カレッジとマーシャル・カレッジの統合計画に導くことになるのである。

９．アバディーン大学統合計画（1785～87年）

1780年、マーシャル・カレッジの自然哲学教授パトリック・コープランドは、カレッジの天文台を改良するための募金運動を始め、総長ビュート卿は、赤道儀望遠鏡など500ポンド以上の寄付をし、1783年にはカレッジへの医学図書館の寄付を約束し、1,300冊の図書を寄贈した。1784年と1785年の夏、コープランドがロンドンに行った際、総長ビュート卿を訪問し、両カレッジ統合問題についても議論した。コープランドがアバディーンに戻った後、マーシャル・カレッジの同僚や、キングズ・カレッジのオーグルヴィ等に、この統合問題についてのビュート卿の強い関心について報告した[69]。

マーシャル・カレッジの教授陣は間もなく、会議を開き、統合計画についてできるだけ早く検討することを、満場一致で決議した。1785年の学期初めの前の秋、キングズ・カレッジとマーシャル・カレッジの教授達によって開かれた年一度のディナーの際には、統合計画についての噂が、キングズ・カレッジの教授達の間にも広まっていた。

数日後、トーマス・ゴードン教授とアレクサンダー・ジェラード教授は、マーシャル・カレッジのジョージ・キャンベル学長を訪れ、ビュート卿と彼のカレッジの間で交わされたか、将来交わされる、すべての手紙をすべて見ることを要求したが、キャンベル学長は、彼らの要求を拒否した[70]。オーグルヴィも、キングズ・カレッジの不正の根絶の他に、カレッジ統合から生じる多くの利点があると改めて主張した。それに伴って、マーシャル・カレッジやキングズ・カレッジのオーグルヴィと統合反対派、保守的な同僚との対立が生

じることとなった。ジョン・チャーマーズ学長とキングズ・カレッジの退職を間近にした教授や、伝統的制度の廃止に反対するグループ、財産の管理の誤りについて査察官（visitors）に警戒する地主階級などが統合計画に反対した[71]。

この対立は、1786年４月に、オーグルヴィが学頭法廷（rectorial court）に上訴したことによって頂点に達した。翌月、５月１日に、ウィリアム・フォーブズ卿が、学頭（Rector）に選出された。フォーブズ卿も、彼の同僚の管理の誤りと不正に関して、オーグルヴィの見解に同情的で、間もなく統合賛成派の立場を明確にした。ジェームス・ダンバーやジョン・ロスもオーグルヴィの抗議運動に参加し、統合計画を支持し続けた。オーグルヴィ、ジェームス・ダンバー、ジョン・ロスのいずれも総長デスクフォード卿の部下ないし彼に任命された者であった[72]。しかしフォーブズ卿は、キングズ・カレッジで学頭に就任することを拒否された。1786年５月14日、オーグルヴィとダンバーは、フォーブズ卿の就任を拒否した教員達を、官職剥奪の行為として批判した。マーシャル・カレッジも、1786年６月６日までには、国王査察（Royal Visitation）のために請願すると既に決めていた[73]。

1786年７月中旬から翌年まで、マーシャル・カレッジの教授達は、スコットランドとイングランドで、彼らの請願の支持を求める手紙とともに、統合の印刷された計画を配布した。スコットランド北東部の貴族のいく人かは、国王査察のための請願に署名を求める添え状とともに、印刷された統合計画を、７月17日までに受け取って、返答していた。

総長ビュート伯が推薦する統合計画は、特にスコットランド北部の主要な貴族やジェントルマンによって支持され、９月までには、その計画と請願への支持は、北部の州の多くのジェントルマンや、アバディーン、バンフ、エルジン、フォレス、ネアン、ウィックの市議会、いくつかの長老会やパンフレット執筆者に拡大した。アバディーンの医学関係者達もまた、町に医学校を創る計画に支持を与えた[74]。

反対派のチャーマーズ学長派も、何人かの同盟者を見つけたが、その１人は、スコットランド北東部で大きな選挙区を支配し、影響力を拡大していたファイフ卿（Lord Fife）であった。ファイフ卿は、キングズ・カレッジの所有する聖職推挙権の多くを購入しており、その購入金額12,600ポンドは、スコットランド貴族の購入総額23,112ポンドの半数以上を占めていた。この聖職推挙権は、エルフィンストーンの設立憲章ではカレッジに所属すべきものとされていたのである。彼もまた、前述したキングズ・カレッジの財産問題が、査察官によって取り調べられることを恐れ、マーシャル・カレッジからの手紙を受け取った時、請願に署名することを拒否した。1786年７月25日、チャーマーズ学長は、マーシャル・カレッジが実施した統合賛成派の行為の不当性と、財産権に干渉する不法性について不満を述べ、査察に反対して訴訟事件に着手するため、エディンバラの法律家ウィリアム・タイトラーを雇った。彼は検事総長で後の内務大臣ヘンリー・ダンダスと友好的な関係にあったのである[75]。

こうしてキングズ・カレッジにおける財産管理の悪弊について、査察官（visitors）の摘発を受けることによる財産権や選挙権保有者の権利に関する懸念、そして統合から訴訟や政治的困難が生じるだろうという認識は、ヘンリー・ダンダス、シドニー卿、およびスコットランドの法務長官などを動かし、提案を阻止させることになるのである[76]。

18世紀最後のキングズ・カレッジとマーシャル・カレッジの統合計画は、特に教育を改善してアバディーンのカリキュラムを拡大することを目的とするものであった。なかでも

重要なのは、医学部と法学部を設置する提案であった。しかしこれは、財源が２つのカレッジの間で分割されていては不可能である。両方のカレッジの資産を集め、別々になされていた教育を経済的に行うことによって、法学部や医学部の設置とともに、図書館などの設備を拡充すべきである、と強調した[77]。カレッジに別々に所属する図書館、博物館、天文台や植物園は、長い間、貧弱な基金しか与えられず不完全なままである。しかし、それらの各々の基金が統合され、管理されるなら、これらの施設が地域のために提供され、若者の自由な好奇心を興奮させ満足させるために有効に利用されることになるであろう[78]。

以上のようなキングズ・カレッジとマーシャル・カレッジの統合が、キングズ・カレッジの７名の教授によって拒否された時、オーグルヴィ達は、公衆に訴えることを決定した。1786年７月20日、アバディーンで発行された、彼のパンフレット、『アバディーン大学のキングズ・カレッジとマーシャル・カレッジを統合する計画の概要、教育をより完全なシステムにするための見解』において、統合の全体的な論点を、下記のように改めて明確にした。

２つのカレッジは、より大規模な計画に基づき、教育を行う目的のために統合されるべきであり、グラスゴー大学が、そのモデルと考えられる。１人の学長と15人の教授を持つ大学のうち、８人ずつが各カレッジに配置され、授業の半分が各カレッジで教えられるものとする。現在の３つの職が廃止され、その給料は大学の公共の用途に回されるべきである。廃止された職の給料から年間少なくとも100ポンドが差し引かれ、本、器具など公共の用途のため、年額100ポンドがあてられ、残りは年額200ポンドに達するまで蓄積される。現職者の、いかなる給料、報酬、特別給付も奪われないし、いかなる新たな職や義務も引き受けるよう強制されない。パトロネジと基金の管理は、彼らの在任期間の間、現在付与されているメンバーに維持され、補償される。

また医学部の設置に緊急の注意が払われるべきであり、このため解剖学教室と植物園が、できるだけ早く提供されるべきものとする。これによってエディンバラや医務室から遠い距離にいる青年のかなりの数は、希望を与えられるであろう。グラスゴー大学では、医学部や法学部の授業に出席する人が多く、西部諸州の若者に少なからず役立っていることは明らかであり、ここアバディーンでも同じくらいの数の若者が医学に、またはるかに多数の若者が法学の道に進むと期待できるのである、と[79]。

オーグルヴィ達の声明は、1786年10月９日のアバディーン・ジャーナルの中でも表明された。その中でフォーブズ卿も、統合計画への賛成を改めて言明した。このオーグルヴィを中心とした統合計画をめぐって、その後も論争は続き、一種の「文書合戦」の様相を呈することになるのである[80]。

総括と展望

アバディーン大学のマーシャル・カレッジは、様々な意味で都市の環境とアバディーンの商人の願望を反映し、小規模な地主出身者が多かった。一方、キングズ・カレッジでは、ハイランド地方出身の学生の比率が高く、少なくとも５人の教授は貴族の称号を持つ家系の出身であった。教育内容においても、自然科学よりも、歴史、古典、道徳教育の分野において、地主家族の要求を満たすことに重点を置き、採用人事においても閉鎖的で親族関係を重視し、1690年から1800年の期間中、67人中38人（57％）の教師はカレッジの中に親

戚を持っていた。これに対してマーシャル・カレッジでは、市議会や総長、学頭、政治家など外部の影響力が人事にも及び、その過程はエディンバラやグラスゴー大学に近いものがあった[81]。このような両者の利害対立は、18世紀における数度のカレッジ統合計画が実現困難な原因の１つともなるのである。

前述したように、18世紀半ばのカリキュラム改革においては、スコラ主義を拒絶するとともに、オランダをはじめとするヨーロッパから自らを解き放し、ラテン語に代って英語が、教育言語として取り入れられた。教育内容や学生募集も概してスコットランドの地主社会を念頭に置いたものであり、とりわけキングズ・カレッジでは、その傾向が顕著であった。しかし、カリキュラム改革にともなって、学生募集、リージェント制、全寮制、学期延長、奨学金といった諸問題が提起され、カレッジ統合計画と相まって党派対立も激化する。オーグルヴィの統合計画も、そこで新たな展開を遂げる。

1747～49年の統合計画は、ハイランド地方の文明化と教員の給与改善を目的としてキングズ・カレッジへの統合を目指したが、マーシャル・カレッジの反対に遭遇した。1753～55年のカリキュラム改革と統合計画も、啓蒙の拠点確立と学生数増加・教員給与改善を目指したが、両カレッジのリージェント制、全寮制をめぐる見解の相違と利害対立が露見する結果となった。1770～72年の統合計画も両カレッジの確執のため実現しなかった。その後、キングズ・カレッジの土地売却、収賄、奨学金流用問題の発覚も相俟って、特にオーグルヴィは、それまでの統合計画における教員給与改善のための剰余金分配を真っ向から批判し、大学教育の設備充実を訴え、その手段として1786～87年にカレッジ統合を主張したのである。しかし、査察によって不正経営の露見を懸念するチャーマーズ学長派やファイフ卿、ヘンリー・ダンダスなどの強固な反対に遭遇することになる。

のちに医学教育がアバディーンで始まった時、それはマーシャル・カレッジに基礎を置くものとなった。アバディーンの書籍や実験器具等の寄贈は、天文学や自然科学や医学の教育の発展にとって重要であった。アーガイル公やビュート卿は、数度の統合計画を支持するとともに、スコットランド啓蒙期の数々の知識人や文化を育成する上で幾多の貢献をし、スコットランド文明化の使命遂行と支配強化をもたらした[82]。

18世紀後半に至って、スコットランド社会自体のグレートブリテンとの統合化も強化され、スコットランド諸大学も、イギリス帝国の大学という色彩を帯びていくのであるが、一方では急進主義の影響の中でイギリス地主社会への批判も大学の中から生まれてくる。オーグルヴィの土地所有権論や大学改革運動も巨視的には、そのような流れの中で捉えることもできる。事実、オーグルヴィは、フランス革命を擁護するための努力において、彼自身の生徒への直接的影響を、公衆の前で認めた。プリーストリー博士を弁護し、イギリスの自由と同様にフランス革命を擁護した、ケンブリッジのロバートホール師も、オーグルヴィの弟子であった。ロバートホール師と、サー・ジェームズ・マッキントッシュの両方は、革命と人間の権利のための、擁護の源として、オーグルヴィを挙げた。キングズ・カレッジのオーグルヴィの師のトーマス・リードも、1792年８月になっても、国民議会に祝辞と基金を送っており、オーグルヴィもナポレオン戦争まで、フランス革命への彼の共感を維持した[83]。ともあれ、産業革命、アメリカ独立革命、フランス革命といった激動の時代の中で、アバディーンの両カレッジも変貌を遂げていく。

19世紀に入って、また幾度も統合運動が繰り返された後、1858年にはスコットランド大

学法が制定され、次のような規定を第１条とする法律が成立する。すなわちキングズ・カレッジをアバディーン大学の文学部および神学部として、そこで文学部の博物学講義を除く両学部の教育を行い、マーシャル・カレッジはアバディーン大学の法学部および医学部とし、そこで両学部の教育と文学部の博物学講義を行う。オーグルヴィの統合計画をめぐる論争と、その後の展開についての詳細は別稿に譲るが、こうして1860年に、キングズ・カレッジとマーシャル・カレッジの統合が実現し、その新生大学が、現在のアバディーン大学に発展していくのである。

注

1）Roger L. Emerson, *Professors, Patronage and Politics: The Aberdeen Universities in the Eighteenth Century*, Aberdeen, 1992,（以下 Emerson, *Professors* と略記）, p.14.

2）Alexander Morgan, *Rise and Progress of Scottish Education*, 1927, Edinburgh, pp.5-25; Paul Dukes ed., *The Universities of Aberdeen and Europe: The First Three Centuries*, Aberdeen, 1995, pp.9-34.

3）Paul B. Wood, *Aberdeen Enlightenment: The Arts Curriculum in the Eighteenth Century*, Aberdeen, 1993. Appendix I: pp.225-226; *Studies in the History and Development of the University of Aberdeen*, 1906, pp.57-60.

4）Emerson, *Professors*, p.28.

5）Emerson, *Professors*, p.26.

6）John L. Roberts, *The Jacobite Wars: Scotland and the Military Campaigns of 1715 and 1745*, Edinburgh, 2002, p.115; Lenman, *Jacobite Risings in Britain 1689～1746*, 1980, pp.101-102, 216-218, 246-247; Murray G. H. Pittock, *Jacobitism*, 1998, pp.43, 82-84, 108; Paul B. Wood, *op.cit.*, p.63, Emerson, *Professors*, pp.26-39.

7）Emerson, *Professors*, p.40.

8）Emerson, *Professors*, p.45.

9）Emerson, *Professors*, p.64.

10）Paul B. Wood, *op.cit.*, pp.61-62; Roger L. Emerson, *Academic Patronage in the Scottish Enlightenment, Glasgow, Edinburgh and St Andrews Universities*, Edinburgh University Press, 2008, pp.448-453.

11）R S Rait, *The Universities of Aberdeen: A History*, Aberdeen, 1895, p.342.

12）*Memorials, Relating to the Union of the King's and Marischal Colleges of Aberdeen*,（以下 *Memorials*, 1755と略記）Aberdeen, 1755, pp.20, 35-36 footnote; R S Rait, *op.cit.*, p.343.

13）*Memorial concerning the north of Scotland*.（AUL, MS361/10/3）, f.1r; Paul B. Wood, *op.cit.*, pp.225-7; R S Rait, *op.cit.*, p.343.

14）*Memorial concerning the north of Scotland*, f.1r; Paul B. Wood, *op.cit.*, p.63.

15）*Memorial concerning the north of Scotland*, f.2r.

16）Paul B. Wood, *op.cit.*, p.162; W. R. Humphries, *William Ogilvie and the Projected Union of the Colleges, 1786-7*, Aberdeen, 1940, p.31.

17）Paul B. Wood, *op.cit.*, pp.63-64; Peter John Anderson, *Notes on the Evolution of the Arts Curriculum in the Universities of Aberdeen*, 1908, Kessinger Publishing,（以下Anderson, *Notes* と略記）, pp.7-11.

18）Alexander Gerard, *A Plan of Education in the Marischal College and University of Aberdeen with the Reasons for it*, Aberdeen, 1755, pp.3, 5, 27, 34.
19）Alexander Gerard, *op.cit.*, p.28.
20）Alexander Gerard, *op.cit.*, pp.29-31.
21）Alexander Gerard, *op.cit.*, pp.32-33.
22）Alexander Gerard, *op.cit.*, pp.34-35; Paul B. Wood, *op.cit.*, pp.65-66.
23）Paul B. Wood, *op.cit.*, p.71; Anderson, *Notes*, pp.7-11.
24）George Turnbull, *Observations upon Liberal Education, in All its Branches*, London, 1742. Liberty Fund, Inc. 2003.
25）R S Rait, *op.cit.*, p.202; Patricia Dennison, David Ditchburn and Michael Lynch eds., *Aberdeen Before 1800, A New History*, Tuckwell Press, 2002, pp.339-340.
26）Paul B. Wood, *op.cit.*, p.73.
27）Paul B. Wood, *op.cit.*, p.162.
28）Paul B. Wood, *op.cit.*, pp.69-70, *Memorials*, 1755, p.34 footnote.
29）W. R. Humphries, *op.cit.*, p.31
30）“Articles of Union, agreed upon betwixt the Principals and Masters of the King’s and Marischal Colleges of Aberdeen, referred to in the above Letter, and written by Dr. Alexander Gerard, Clerk to the conjunct meeting”, 1754, in *A complete collection of the papers relating to the union of the King’s and Marischal Colleges of Aberdeen: containing, not only those already published by authority, but also several original papers, and many by anonymous writers on both sides of the question*, Aberdeen: Shirrefs, 1787,（以下 *A complete collection* と略記）, pp.2-5.
31）“Extract of a Letter to the Public from Principal Chalmers, by appointment of the University of Old Aberdeen”, dated King’s College, 5th February, 1755, in *A complete collection*, p.1.
32）W. R. Humphries, *op.cit.*, pp.32-33; Paul B. Wood, *op.cit.*, p.69.
33）W. R. Humphries, *op.cit.*, p.31, *Memorials*, 1755, pp.10-12, 33 footnote.
34）Paul B. Wood, *op.cit.*, pp.36-38.
35）*Memorials*, 1755, pp.4-5, 28.
36）*Memorials*, 1755, pp.17-19.
37）R S Rait, *op.cit.*, pp.343-344; Paul B. Wood, *op.cit.*, p.162.
38）Colin A. McLarens, *Aberdeen Students, 1600～1860*, University of Aberdeen, 2005, p.67; AUL, MS K43, pp.371-372.
39）Paul B. Wood, *op.cit.*, pp.47, 68, 69; Emerson, *Professors*, p.7; Anderson, *Notes*, p.9.
40）Emerson, *Professors*, p.14.
41）Emerson, *Professors*, p.80.
42）R S Rait, *op.cit.*, pp.198-199; Colin A. McLarens, *op.cit.*, p.68.
43）Colin A. McLarens, *op.cit.*, pp.67-68.
44）AUL, MS K28, p.36; MS K44, p.57.
45）AUL, MS K44, p.56; Colin A. McLarens, *op.cit.*, p.84.
46）Paul B. Wood, *op.cit.*, pp.71-72.
47）R S Rait, *op.cit.*, pp.199-200.
48）Colin A. McLarens, *op.cit.*, pp.84-85.
49）Colin A. McLarens, *op.cit.*, pp.69, 84-85.

50）Emerson, *Professors*, p.81.

51）R S Rait, *op.cit.*, pp.202-203.

52）Paul B. Wood, *op.cit.*, p.72; Emerson, *Professors*, pp.81-83.

53）Emerson, *Professors*, p.86.

54）Emerson, *Professors*, pp.78, 80, 87, 92.

55）R S Rait, *op.cit.*, pp.344-345. "Reasons and Proposals for an Union of the King's and Marischal Colleges of Aberdeen", written by Professor Thomas Gordon, in the year 1770, in *A complete collection*, pp.6-11.

56）"Extract from a Memorial concerning the Union of the Colleges, written by Mr. G. then a Member of Marischal College, never before published", in *A complete collection*, pp.11-12.

57）W. R. Humphries, *op.cit.*, pp.32-33; Istvan Hont and Michael Ignatieff eds., *Wealth and Virtue, The Shaping of Political Economy in the Scottish Enlightenment*, 1983, Cambridge University Press, pp.116-117.

58）Emerson, *Professors*, p.78; Roger L. Emerson, "Aberdeen Professors 1690～1800: Two Structures, Two Professoriates, Two Careers", in *Aberdeen and the Enlightenment*, 1987,（以下 Emerson, "Aberdeen Professors" と略記）, pp.156-157.

59）*Birthright in Land: An Essay on the Right of Property of Land*, By William Ogilvie, 1782, Reprinted 1970, by Augustus M. Kelley Publishers, T・スペンス、W・オーグルヴィ、T・ペイン、四野宮三郎訳『近代土地改革思想の源流』、御茶の水書房、1982年。

60）"Reasons of Protest against the proposed Bargain with Mr. Hugh Leslie given in on April 17th, 1784, in *Copies of Memorials, and Reasons of Protest, in the years 1784 and 1785*, King's College, 1787,（以下 *Copies of Memorials* と略記）, pp.2-3.

61）W. R. Humphries, *op.cit.*, p.4.

62）Colin A. McLarens, *op.cit.*, p.94; "Proposal given in to the College meeting November 20th 1784", in *Copies of Memorials*, pp.4-5; W. R. Humphries, *op.cit.*, p.14.

63）W. R. Humphries, *op.cit.*; *Supplement to the Collection of Papers, Relating to the Union of The King's and Marischal Colleges of Aberdeen. Containing Papers never published before, and intended chiefly to throw Light on the Affairs of King's College, and the Opposition to an Union, which has arisen in that Society*, published in April 1787, By Professor William Ogilvie, pp.18-25.

64）W. R. Humphries, *op.cit.*, p.15; *Supplement to the Collection of Papers*, published in April 1787, By Professor William Ogilvie, pp.19-20.

65）W. R. Humphries, *op.cit.*, p.16.

66）William Ogilvie, *Proposals for a publick library at Aberdeen* 1764. [S.l. : s.n.], 1893; W. R. Humphries, *op.cit.*, p.17.

67）"Reasons of Protest against the Resolutions of the College meeting April 9th, 1785," in *Copies of Memorials*, p.5; W. R. Humphries, op.cit., p.6.

68）*Supplement to the Collection of Papers*, No. V. published in April 1787, By Professor William Ogilvie, W. R. Humphries, *op.cit.*, p.7.

69）Roger L. Emerson, "Lord Bute and the Scottish universities, 1760～1792.", in *Lord Bute: Essays in Re-interpretation*. ed. by Karl W. Schweizer, Leicester University Press, 1988.（以下 Emerson, "Lord Bute" と略記）, pp.163-164.

70）*A complete collection*, pp.13, 130, 135, 140-142, 156, 157; Emerson, “Lord Bute”, pp.164, 165.
71）Emerson, *Professors*, p.93.
72）Emerson, *Professors*, pp.92, 93, 95; Emerson, “Aberdeen Professors”, p.158.
73）*A complete collection*, pp.13, 130; Emerson, “Lord Bute”, p.164; Emerson, *Professors*, p.95.
74）Emerson, “Lord Bute”, p.167.
75）*Documents Relating to the University and King's College, Old Aberdeen, compiled by a Committee of Graduates of the University of Aberdeen in 1839*, p.23; W. R. Humphries, *op.cit.*, p.10.
76）Emerson, *Professors*, *op.cit.*, p.95; Emerson, “Lord Bute”, p.168.
77）Emerson, *Professors*, pp.87, 93.
78）W. R. Humphries, *op.cit.*, p.30.
79）W. R. Humphries, *op.cit.*, pp.28-29.
80）Ogilvie, William, *Outlines of a plan for uniting the King's and Marischal Universities of Aberdeen, with a view to render the system of education more complete*, 1786 in *A Collection of All the papers relating to the union of the King's and Marischal Colleges of Aberdeen, which have been published by authority of the Colleges*, London: Printed for T. Evans, 1787, pp.3-6, in *A complete collection*, pp.13-20.
81）Emerson, “Aberdeen Professors”, pp.160-164.
82）Emerson, “Lord Bute”, pp.163, 170.
83）MacDonald, “Biographical Notes”, in *Birthright in Land*, pp.152-153, 385; Sir James Mackintosh, *Vindicae Gallicae, A Defence of the French Revolution and Its English Admirers, against the Accusations of the Late Production of Mons. de Calonne*, fourth ed. London, 1792, p.313.

キーワード：アバディーン　大学　カレッジ統合　カリキュラム改革　オーグルヴィ

（WATANABE Yuji）